

## シュザンヌ・カルプレスのルネサンスと20世紀カンボジア上座仏教の 復興過程における質的変容

調 邦行

### **Suzanne Karpelès' Renaissance and the Transformation of Cambodian Theravāda Buddhism During its Revival in the 20th Century**

SHIRABE Kuniyuki

#### **Abstract**

Suzanne Karpelès (1890-1968) was the first female scholar who joined the École française d'Extrême-Orient in Hanoi. She was transferred to Cambodia in 1924 at the request of the Résident Supérieur of Cambodia to assist in the revival of Buddhism. She mentioned in her memoir that she had made it her mission to raise the cultural and Buddhist renaissance in Cambodia. In particular, she believed that "Cambodian Buddhism should not be considered a religion, but a powerful moral force for the maintenance of society."

At that time, in the Cambodian Buddhism Mahānikāy sect, there was a conflict between the reformist monks who advocated to practice faithfully according to the precepts in the Pali canon, and the traditionalists who persisted in conventional practices. Her way of thinking as a scholar aligned with the ideas of the reformists. They were inspired to infuse new life into Cambodian Buddhism. She appealed to the French-Indochina government to establish the Royal Library and the Buddhist Institute as a center to protect Theravāda Buddhism in Cambodia, Laos, and Cochinchina. The reformist monks, who made the most of the library and institute as a base for their activity, changed their unobtrusive attitude into a missionary one under her influence.

Their efforts transformed Cambodian Buddhism into a religion that actively preached to the masses, which was different from the general concept of Theravāda Buddhism at that time. Although she left Cambodia in 1941 due to the Vichy regime's anti-Jewish policy, her renaissance spirit contributed to the revitalization of Cambodian Buddhism and eventually shaped it into an established religion with a moral force used to maintain society, as she had imagined.



## 目次

## はじめに

1. カルプレスの業績や活動などに関する先行研究
2. 仏教変革運動との出会い
3. 仏教復興過程におけるカルプレスの取り組みと展開

## 4. カンボジア上座仏教の質的変容

- 4.1 仏教復興の様相
- 4.2 大衆を教え導く上座仏教へ

## おわりに

## はじめに

カンボジア仏教復興<sup>1</sup>の始まりは、19 世紀中葉に国王の座についたアン・ドゥオン（在位 1848-1860）の時代に遡る<sup>2</sup>。その後カンボジアはフランスの保護国となるが、インドシナ連邦政府<sup>3</sup>はカンボジア社会における仏教の重要性を認識して尊重する姿勢を保った。カンボジアの仏教は上座仏教であり、王族の支持を受けるトアンマユット派と一般大衆を基盤に持つモハーニカイ派の二派が存在する。そのモハーニカイ派内部では 1910 年代、比丘が従うべき規律集である律蔵<sup>4</sup>を正しく理解し、忠実に守ろうとする比丘たちによって仏教変革運動が起こされた [Edwards 2007:114-116]。彼らは呪術や宗教上の慣習的实践を排除し、聖典用語であるパーリ語で著された仏典をクメール語<sup>5</sup>に翻訳して印刷するなど革新的な実践を行い、伝統にこだわる派と対立していった。

そのような時代、連邦政府に招かれカンボジア仏教の復興に尽力した人物がフランス人東洋学者シュザンヌ・カルプレス（Suzanne Karpelès 1890-1968）である。彼女は、1922 年に女性としてはじめてハノイのフランス国立極東学院（École française d'Extrême-Orient 以後 EFEO）の研究者に選ばれた気鋭の学者で、その後カンボジア高等弁務官の要請によりカンボジアに渡り、自ら設立を提案した王立図書館の実質的館長である首席学芸員（1925-1941）、また仏教研究所事務局長（1930-1941）として存分に腕を振るった。彼女はカンボジア滞在 9 年目に、*Journal of the American Association of University Women*<sup>6</sup>に当時取り組んでいたプロジェクトの目的とその経過を報告し、それは同誌 1933 年 6 月号に「*Renascence in Cambodia*」というタ

イトルで掲載された。そこにはカンボジア仏教と文化の復興にかける彼女の意志が端的に表されている [Karpelès 1933a]。

ルネサンスが再生、復興を意味し、14 世紀にイタリアで起こりヨーロッパ各地に広がった文化運動であることは広く知られている。また、16 世紀にはヨーロッパに宗教改革の波が押し寄せ、特に彼女の出身国であるフランスではカトリックとプロテスタントが激しく対立した時代でもある。彼女が記事で用いた「ルネサンス」は復興という意味であろうが、折しもカンボジアは仏教変革運動の最中であり、彼女の思想はこの運動理念と共鳴し、その活動はヨーロッパの宗教改革と同じ効果<sup>7</sup>を生み出すこととなった。学者として仏教文献重視の立場に立つカルプレスの考えが、仏教変革を志す僧たちの理念と合致したことは蓋然性が高い。彼ら変革派の僧たちは、後に彼女が設立する機関を拠点として運動を展開していった。この運動の流れはサンガ内部の変革から、視点を人々にも向けた伝道志向へと移行し、やがてそれは当時の一般的な上座仏教の概念<sup>8</sup>とは異なる、積極的に大衆を「教え導く」仏教への質的変容をもたらしたと考えられる。

次章で述べるように、これまでの研究でカルプレスが残したカンボジア仏教や文化方面における主だった業績については数多く論じられてきた。しかし、その基本的な思想や仏教変革を志した僧たちに与えた影響、その結果カンボジア仏教に表れた変化については十分に検討されているとはいえない。後述するように、カルプレスが取り組んだ仏教復興策とサンガ内部の仏教変革運動の歯車がかみ合い、カンボジア仏教に変化が生まれ始めた。その結果、仏教変革運動の根幹をなす仏典のクメール語への翻訳は、カンボジア国民

だれでもが理解できる仏教聖典三蔵翻訳のための国家プロジェクトへと進展し、1947年に制定されたカンボジア初の王国憲法で仏教は国教と規定されるなどカンボジア仏教に変化が現れた。

本稿では、これらの流れを作った仏教変革の理念と、カルプレスにとっての「カンボジアのルネサンス」、特に仏教復興に対する信念および業績の関係を検討し、それらが連携した運動の結果、近代カンボジア仏教に生じた変化について考察を試みるものである。そのために、まず彼女のカンボジア仏教復興に対する思いに焦点を当て、それが仏教変革運動の理念とどのように結びついていったかを検討する。次に、彼女が取り組んだ仏教復興に関するそれぞれの事業の展開状況を概観し、それらがカンボジア仏教に及ぼした影響を考察する。最後に、フランス保護国カンボジアにおける仏教復興の様相を浮き彫りにし、更に復興の過程で生じた変容の方向を明らかにしたい。

## 1. カルプレスの業績や活動などに関する先行研究

カンボジアにおけるカルプレスの活動の内容や業績は、これまでの先行研究で概ね明らかにされている。エドワーズは、カルプレスが仏教僧たちに尊敬される一方で、古い体質のフランス人社会では女性であることへの強い反感があったことに言及している。そのような中で、彼女と僧たちの働きはカンボジア国民宗教の創出に貢献したと指摘する [Edwards 2004; 2007]。この論点はカンボジア仏教の質的変容に関連しており、その経緯については本稿でも考察する。フィリオザは、彼女が EFEO でスリランカのパーリ語テキストとカンボジア語の写本を照合し、バンコクでも同様の研究をしたことや 1941 年にカンボジアを去った後スリランカの仏教百科事典編集に関与したことなど学問研究分野での活動を明らかにしている [Filliozat 1969]。これらのことから、カルプレスは上座仏教のパーリ語仏典に精通していたことが窺え、そのことが僧たちとの意思疎通を容易にしたと考えることができ

る。また、キーンの研究では、カルプレスが雑誌『カンブチア・ソリヤ』<sup>9</sup>にカンボジアにおける初期の散文文学であるキーム・ハックの「トンレサープの水 (dýk danlesāp)」を掲載<sup>10</sup>し、また、仏教の教えを基本にして農民を啓蒙し続けた詩人クロム・ゴイ (1865-1936) の作品を編集出版するなどカンボジア文学の発展にも寄与したことが明らかにされている [Khing 2006-2007]。彼女がカンボジアにおける文字文化の保護やそれを人々に紹介しようとする努力は、後述する王立図書館の設立や図書館車の定期的運行などにも反映されている。

更に、ジェンダーの観点からカルプレスの活動に注目した論述もある。グッドマンの研究では、カルプレスの母親や知人に宛てた手紙から、彼女が男性中心の植民地社会の中で先進的な女性として活動したことやカンボジアにおける教育映画の効果を認め<sup>11</sup>、国際女性評議会 (International Council of Women [ICW]) の名誉幹事としてその普及に力を入れたことに言及している [Goodman 2018a; b]。後者の研究で彼女の国際的なネットワークが明らかにされており、グローバルな視点でカンボジアを見つめ、自らの活動に結び付けていたことを知ることができる。

ハンセンはカンボジア仏教の近代化を論述する中で、カルプレスはその近代化に影響を与えたルイ・フィノー (Louis Finot 1864-1935)、ジョルジュ・セデス (Georges Coedès 1886-1969) と並ぶフランス人学者であり、彼女による仏教研究所の設立がその終着点であると定義づける [Hansen 2007]。この点について、仏教の近代化という観点は貴重であるが、それは仏教変革を目指す僧たちが自らの意志で仏教を変化させていった運動の一側面である。

以上の研究ではいずれも貴重な論考がなされているが、カルプレスによるカンボジア仏教や文化に向けた貢献という面に重きが置かれる傾向が見られる。それに対して、カンボジア仏教変革に主体的に取り組んでいた僧たちが彼女の理念をどのように受け止め影響されたのか、また仏教変革運動の中で彼女がどのような位置を占めたのか、という視点からの考察も本稿で述

べるカンボジア仏教の質的変容を検討する上で一定の意味をなすものとする。

## 2. 仏教変革運動との出会い

仏教変革運動は 20 世紀初頭、プノンペン・ウナローム寺の比丘ラタ・タオン (1862-1927) を中心としたチュオン・ナート (1883-1969)、フオト・タート (1891-1975?)、ルヴィー・アエム (1878-1957)、ウム・スー (1880-1939) などの比丘たちによって主導された。タイやベトナムとの長い戦乱<sup>12</sup>が続いたカンボジアは、20 世紀に入っても三蔵の散逸や経典の知識を備えた僧の不足により仏教の復興は遅れていた。危機感を覚えた僧はタイに向かいパーリ語や仏教教理を学び、仏典の収集に努めた。彼らはパーリ語仏典の学習において、カンボジアでは内容の理解よりも暗誦を重視したのに対し、タイでは仏典を文法的に解析して合理的な方法で仏教教理が理解されていることに衝撃を受けた。また、同国ではタマユット派<sup>13</sup>だけではなく、モハニカイ派にも戒律を重視する思想が浸透し、カンボジアの留学僧はその影響を強く受けて帰国した [Hansen 2007: 92]。

留学僧の一人であったラタ・タオンは仏典を正確に理解することの重要性を認識し、持ち帰ったパーリ語仏典の研究に努めた。彼の弟子であるチュオン・ナートやフオト・タートはそれらのクメール語への翻訳に取り組んだ。律蔵の内容を理解した彼らは、従来の実践には仏典に書かれた内容から離れたものがあり、それらを改めて正しい実践をおこなうべきだと唱え、ジャータカ<sup>14</sup>の中で後世に潤色された部分<sup>15</sup>などは排除すべきだと主張し始めた [Huot 1970: 17]。更に、彼らはクメール語に翻訳された仏典を印刷し、パーリ語で書かれた内容をだれでもが理解できるようにして広めることに傾注した。仏典の翻訳は仏教変革運動の根幹をなす活動となり、その後のカンボジア仏教の変化を促す大きな要因となる。

このころから仏教変革派の僧たちはモハーニカイ派内部で新仏法派と呼ばれ、伝統的実践を守ろうと

する集団は旧仏法派と呼ばれるようになった [Huot 1970: 11]。1909 年、タイ仏教の影響を排除するため、カンボジア高等弁務官とシソワット国王 (在位 1904-1927) が相図ってシェムリアップにパーリ語学校を設立したことにより、カンボジア独自の仏教教育が開始された [Persee 2005-2020a: 823-827]。この学校は 2 年後に閉校されるが、1914 年に新たなパーリ語学校がプノンペンに開校されると [Persee 2005-2020b: 95]、ラタ・タオンが校長に就任して本格的なパーリ語教育と仏典の研究が始まった。また、同時に同学校は新仏法派の活動拠点となっていった。当時、新仏法派が翻訳した仏典の印刷を願い出ても容易に認められず、無許可で印刷したことから旧仏法派による宗教省への提訴となり、国王が査問会議を開催するまでに両派の対立は激しかった [Huot 1970: 16]。このような仏教変革運動の最中の 1922 年、チュオン・ナートとフオト・タートはサンスクリット語を習得するためハノイの EFEO に 2 年間の留学を命じられた。新仏法派の二人が、共に仏教復興に取り組むカルプレスに出会うのはこの時である [Edwards 2007: 186]。

カルプレスは、国立東洋言語学校、高等研究実習院を卒業した時からインドシナの国々に自然と興味を覚えたという [Karpelès 1933a: 71]。1922 年、彼女は碑文・文芸アカデミーから EFEO 研究者に指名されハノイに向かった。着任後直ちに、スリランカで発行されたパーリ語仏典とカンボジアの仏典との比較研究に取り組んだ。また、1923 年にバンコクへ派遣された後、同じテキストとの比較をおこない、翌年にはダンマパダ注釈書 (*Dhammapada-aṭṭhakatā*) のうち 6 章をフランス語に翻訳して発表している [Filliozat 1969: 1-3]。その後、彼女は高等パーリ語学校での教育内容の充実を望むカンボジア高等弁務官の要請によりプノンペンに赴任した。彼女はそこでカンボジア王国政府高官の排他主義に遭い、また女性であることでフランス人男性社会からの抵抗を受けたと述懐している。しかし、彼女の仏教に関する広い知識は高等パーリ語学校の教官たちにも注目され、徐々に彼らの信頼を得ていくこととなる。1924 年、彼女はカンボジアの文化と仏



教の復興への意気に燃えて活動を開始した [Karpelès 1933a: 71]。

当時カンボジアには高等パーリ語学校（旧パーリ語学校）が開設されていたとはいえ、パーリ語三蔵全経典はまだ完備されておらず、校長であるラタ・タオンがバンコクに仏典の渉獵に出かけているほどである [Cœdès 1915: 75]。彼女も以前おこなった研究によってカンボジアの三蔵は重要な部分が欠落していることに気づいており、カンボジア仏教の復興にとってまず必要なことは、仏典の回復であると認識していた [Karpelès 1933a: 71-72]。このように、聖典三蔵を完備することの必要性に対して、新仏法派僧とカルプレスは基本的に共通の認識を持っていたのである。カルプレスはこの問題を解決するため、図書館の設立によって仏典の整備を進める必要があることをカンボジア高等弁務官に報告した。彼女の提案は直ちに受け入れられ、シソワット国王は王立図書館設立の国王布告を発した。この後同図書館に貴重な資料が集中的に集められたことにより、さまざまな仏典の翻訳が急速に進んでいった。

次にカルプレスが取り組んだのは、後に述べるカンボジアの仏教と文化を保護する機関としての仏教研究所の設立であった。同研究所の設立は仏教変革運動に新たな役割を与え、カンボジア仏教の質的変容に重要な影響を及ぼすこととなる。このような彼女の積極的な行動を支えた思想の根底には、それまでの学問で培われたインドシナへの強い思いがあった。それは JAAUW の記事<sup>16</sup>に記した次の言葉に表されている。

結果的に、私はカンボジアの知的環境に新しい活力を与え、単なる宗教としてではなく社会を維持するための強い倫理的な力として考えられるべき仏教の復活に全身全霊を捧げることができた [Karpelès 1933a: 71]。  
(筆者試訳)

カルプレスの信念はインドシナ連邦政府を動かし、カンボジア仏教の保護と発展につながる政策として実現された。一方で彼女は、消極的な比丘たちを励まし、

活動する僧へと意識を変えることにも心を砕いている。彼女は活動の幅を広げていったが、当初内気な比丘たちは彼女の提案にも尻込みしたという。一般的に上座仏教の出家者は自らの解脱を求めて修行することを目的としており、社会の人々に向けて進んで仏教の深い教えを広める姿勢はなかったといえる<sup>17</sup>。しかし、彼女の思想的影響を受けた彼らは仏教の教理について積極的に解説するようになり、王立図書館や仏教研究所の活動を通して自らの体質を変えていった。

僧たちの心を動かしたのは、人間や文化に対するカルプレスの深い理解であろう。彼女は、「知ること、理解すること、尊敬すること、愛すること」という簡潔なモットーを掲げて比丘たちを励ましている [Karpelès 1933: 73]。これらの言葉はカンボジアの仏教僧たちには新鮮に聞こえたであろうが、一方では正しい見方と理解を意味する正見、尊敬、愛護、慈悲など仏教の教えに通じるものがあり、抵抗なく受け入れることができたに違いない。また、彼女の思想と行動は僧たちだけではなく、あらゆる層のカンボジア人の敬意を集めた<sup>18</sup>。彼女の考えや行動は仏教が人々のためになすべき役割を新仏法派の僧たちに認識させたものと思われる。彼らの積極的な伝道は人々に向い、カンボジアにおける仏教復興を推進するとともにその後の仏教の質的変容に影響を及ぼしていくこととなるのである。

### 3. 仏教復興過程におけるカルプレスの取り組みと展開

カルプレスは重点的に取り組んだいくつかのテーマを JAAUW の記事で報告している。彼女はまず、仏典整備のための王立図書館の設立をあげる。仏典整備は新仏法派の念願でもあったことから、同図書館設立の背景には改革志向の強いシソワット国王とラタ・タオン、チュオン・ナート、フオト・タート、ルヴィー・アム、ウム・スーなど新仏法派の比丘たちの意向が反映されていたと考えられる [Chheat et al 2005: 13]。同図書館は 1921 年に設立されたクメール図書館を

改編したもので、その目的は「国家的価値のあるクメール語、パーリ語、サンスクリット語で記された政治、歴史、美術、仏教に関する書籍や文献類を収集保管、展示し、書籍を印刷発行すること」とされた〔調 2019: 195〕。彼女は同図書館の主席学芸員に任命され、ここを拠点として活動の幅を広げていくこととなる。国王通達により、同図書館にはカンボジア全土から装飾を施した舟やトラックで貴重な仏典や宗教美術品が続々と集まってきた。カルプレスが「真の十字軍」と称したこれらの寄贈活動によって三蔵をはじめとする仏典の整備が進み、カンボジアの仏教復興の基盤が確立されていったといえる。

一方で来館者への調査の結果、翻訳された携帯可能な仏教書を人々が欲していることを知ったカルプレスは、「カンボジア仏教に新たな息吹を吹き込み、仏教教理の美しさを人々に知らしめる」ため、仏典の内容を刊行物として公開することを決心した〔Karpelès 1933a: 72〕。予想を超える購読希望があり 1926 年、雑誌『カンブチア・ソリヤ』が発刊されることとなった。当初は高等パーリ語学校の教授でさえ定期的出版に慣れず原稿が不足したという。しかし、彼女の激励によって彼らは積極的に原稿を書くようになり、パーリ語仏典をクメール語に翻訳して掲載し、同誌を人々への仏教教理伝道の媒体として活用するようになっていくのである。また、カルプレスはイメージによる仏教教育も重視し、ブッダの生涯などを題材にした大判カラー写真を販売した。更に、仏教の保護者である国王の肖像写真がないことに衝撃を受けた彼女は、カラー印刷した国王と王妃の写真を寺院や家庭に掲示することを勧めた〔Karpelès 1933a: 74〕。このような試みは、国王を頂点として仏教でつながるカンボジア国民としての意識の醸成を促したことであろう。

1928 年、カルプレスはコーチシナ<sup>19</sup>高等弁務官の要請によりフオート・タートとともにベトナム南西部の状況を視察した<sup>20</sup>。彼女はその報告をまとめ、この地におけるカンボジア仏教の衰微に対し、カンボジア、ラオスとコーチシナを包括する仏教研究機関の設立を提案した。彼女の提案を受け入れたインドシナ総督は

1929 年、多くの僧や住民を前にして自ら仏教研究機関の設立を宣言した。カルプレスに同行してこの集會に臨んだフオート・タートは、総督によるフランス語のスピーチを通訳し、次のように人々に伝えている。

この組織の目的は、すべての寺院にチュリエン文字<sup>21</sup>による三蔵を配備すること、すべての出家者が理解できる三蔵をクメール語に翻訳すること、言葉を正しく理解し、話し、書くことができるようにクメール語辞典を発行すること、パーリ語と仏教の知識を持つ僧を教師とする学校をすべての寺院に設置すること、兵士、民兵が学習できる集會所を設置すること、すべての仏教徒が善行をおこなうことができるよう政府の通達を分かりやすく伝達することである〔Huot 1930 14-15〕。  
(筆者試訳)

この内容から、カルプレスはカンボジアにおけるルネサンスの重点的な推進事項として、三蔵全經典のクメール語への翻訳、クメール語国語辞典の発行、改革寺院学校<sup>22</sup>の普及、軍人の学習と仏教伝道センターの設置などを視野に入れていたことが理解できる。後述するように、三蔵のクメール語訳はこの発表の翌年に設置される三蔵委員会によって取り組みが開始されることとなる。また、クメール語辞典はこの時既にチュオン・ナートを編纂責任者として校正段階に入っており、出版に向けた作業が進んでいた〔Cœdès 1938: 315〕。

先述のベトナム南西部の一か月に及ぶ視察旅行<sup>23</sup>で、カルプレスは同地域におけるカンボジア仏教寺院の状況をしらべ、学校の有無、学校設置の意欲などについて聞き取り調査をおこなった。彼女は住職に学校開設を働きかけ、教師になる僧がいなければプノンペンから派遣するとまで申し出ている〔Huot 1927a;b;c;d<sup>24</sup>〕。「カンボジア人は役人への道が開かれる植民地学校 (colonial schools)<sup>25</sup>を好むが、子供たちの精神面では寺院学校 (pagoda schools) の方が適している。」と語っているように〔Goodman 2018b: 425〕、彼女は僧がクメール語によって子供たちを教育することに意義を見

出していたのである。その後、改革寺院学校の開設が進み、男児中心のクラスだけではなく女兒クラスを設ける寺院も現れたことが彼女を喜ばせている [Karpelès 1933a: 72]。

また、兵隊の駐屯地には図書館を開いて王立図書館発行の書籍を配備し、僧を毎月派遣して飲酒や麻薬で荒んだ生活に陥りがちな軍人に対する仏教伝道が開始された [Karpelès 1933a: 73-74]。1930年に仏教研究所が正式に発足<sup>26</sup>すると、彼女は事務局長に任命され、翌年にはラオス仏教研究所も設立させて両国間の仏教交流を可能にしたのである。同研究所は仏教の復興だけではなく、さまざまな文化活動の拠点としても活用されていくこととなる<sup>27</sup>。

最大の事業は、彼女自身「巨大プロジェクト」と称した三蔵翻訳であろう。保守的な僧たちが反対する中<sup>28</sup> [Chheat et al 2005: 25]、仏教研究所の設立に先立つ1929年、国王布告によって三蔵委員会が設置され三蔵のクメール語翻訳が本格的に開始された。発起人にカンボジア高等弁務官、カンボジア政府各大臣と並んでカルプレスが名を連ねた。初代委員長には新仏法派ルヴィー・アエム、副委員長にモハーニカーイ派からウム・スーとトアンマユット派からテープ・オーが選任され、委員はチュオン・ナート、フオト・タート、ハエム・チアウなどをはじめとする比丘二十三名、俗人十一名で編成された。委員会は仏教研究所内に事務局を置き、委員たちはパーリ語文の筆写、パーリ語の精査、パーリ語からクメール語への翻訳、翻訳内容の確認、翻訳文の決定、原稿校正担当に分かれて作業に当たった。翻訳工程では、まず筆写担当が原本からパーリ語文を書き写し、精査担当はそれをタイ、ミャンマー、スリランカ、ヨーロッパのパーリ語三蔵と突き合わせ、異なる点があれば筆写担当が再度確認して文面を確定し、翻訳担当はパーリ語文法書、注釈書を確認して訳文の正確を期した [Sin 2005: 58-59]。彼女は地道な作業に希望を持たせ、委員たちを励まして弛まず前進させたのである。

律蔵の第一巻が1931年に完成し、カンボジア訪問中のフランス植民地大臣によってカンボジア国王に贈

呈された。その後、律蔵十三巻が1936年に刊行され、第二次世界大戦の影響による物資や資金不足のためしばしば作業は中断されたが、1957年に経蔵三十七巻が出版完了した。最終的には1968年に経蔵の一部と論蔵六十巻の翻訳が終了し、パーリ語とクメール語訳を見開きとした三蔵全百十巻が完成した。彼女は十年間でこの記念的事業を終えることができるだろうと予測したが、結果的に四十年の歳月をかけた大事業となった。この国家的事業の開始により、それまでサンガの中で続けられてきた仏教変革は運動としての役目を終了し、カンボジア仏教は新たな段階を迎えたといえる。

## 4. カンボジア上座仏教の質的変容

### 4.1 仏教復興の様相

カンボジアの仏教復興の様相を理解するために、アジア諸国の近代上座仏教復興の状況を概観しておきたい。タイでは1851年に国王に即位したラーマ4世(在位1851-1868)が、キリスト教への改宗を迫るプロテスタント宣教師に対し、仏教こそキリスト教以上に合理的で優れた宗教であるとして対抗した。自身の修行時代に律蔵の教えから離れたサンガの実態を見るに及んだ彼は、戒律を厳しく守るタマユット派<sup>29</sup>を興し、『三界経』<sup>30</sup>は後世に作られたものであるとして排除し、三蔵のみを聖典とする仏教への変革を進めた。その後タイは1902年に「ラタナコーシン暦121年サンガ統治法」を成立させて国家体制の中に仏教を組み込み、中央集権的サンガの制度化による盤石の体制を作り上げた。1932年のクーデターにより絶対王政から立憲君主制に移行し、新しく制定された憲法でも国王と仏教の関係が規定されている。現在タイでは仏教を憲法上の国教とは規定してはいないが、仏教は事実上国教の取り扱いを受けている [石井2003: 3]。

ミャンマーは19世紀中葉、イギリスの圧力を受け続けていた。時の国王ミンドン(在位1853-1878)は、国民の結束を固めるため仏教の復興を急いだが [生野1981: 155]、1886年に英領インドに併合された後仏教



は急激に衰退していった。そのような状況に危機を感じたミャンマー・サンガには仏教復興に向けた自主的な二つの流れが生じた。一つは植民地政府への直接的抵抗運動であり、もう一つは律の順守を第一義とする純粋な仏教復興運動である。一方で、僧レディ（1846-1923）は平易なビルマ語で仏教解説書を著わし、出家者だけではなくすべての人は涅槃を目指すことができると説いた。このような伝道は新興中産階級が自らを組織し、宗教活動を活発化させるバックボーンとなった。在家仏教徒による仏教復興運動は、その後ナショナリズムとつながり、政治運動へと変容しくこととなる〔藏本 2015: 182-192〕。1948 年に独立を果たしたミャンマーは、ウー・ヌが初代首相となり仏教社会主義政策を進めたが、非仏教徒の反発を受け 1962 年の軍事クーデターにより政権は倒された。その後の政権は徹底した政教分離政策を取り仏教を統制する方向へ進んだ〔土佐 2002: 319〕。

一方、スリランカはイギリスに完全植民地化された 1815 年以降、仏教は危機的な状況に陥った。イギリスの支配体制が固まるにつれプロテスタント・ミッシェンの攻勢が強まると、人々がキリスト教に改宗する傾向が著しくなり、敵意を抱いた仏教徒は反キリスト教運動を展開した〔川島 2006: 26-28〕。そのような時代、1873 年に僧グナーナンダ（1823-1890）がパーナドゥラで、大衆を前にしてキリスト教の牧師二人を相手におこなった公開討論会は仏教復興運動を左右することとなった。子供のころ聴衆の一人としてこの論争を聞いたアナガーリカ・ダルマパーラ（1864-1933）は、その後のスリランカ仏教復興運動に大きな影響を与えた。彼は反イギリス、反キリスト教を唱える一方で、怠惰な出家者にも批判の目を向け、在家でありながら禁欲主義を貫いて出家者同様の実践をおこなった。彼は儉約と勤勉を説き、在俗でも涅槃に至ることができるとして在家の意識改革を促した〔ゴンブリッチ、オバーセーカラ 2002: 350-357〕。また、仏教教義に基づいて地域開発を進めようとするサルヴォーダヤ運動<sup>1</sup>を立ち上げたアリヤラトネ（1931-）はダルマパーラの信奉者である。この運動は現在でもスリランカ全

土に展開して地域の開発や地方の人々の意識改革に貢献している。このように、スリランカではキリスト教プロテスタント派の影響を受けて在家の活動が活発におこなわれるようになった。

ところで、アジアの仏教近代化改革運動に関して島〔1998: 4-6〕は、その特徴として、(1)原点・原典回帰主義、(2)合理主義的・人間主義的仏教解釈、(3)在家主義の宗教的平等性、(4)社会改革的傾向、(5)知識人中心の啓蒙主義、(6)キリスト教への対抗、(7)ナショナリズムの基盤の 7 項目をあげている。上記の上座仏教国における仏教復興運動ではこのいくつかの傾向を認めることができる。

翻って、フランスの保護国となったカンボジアとラオス仏教復興運動は上記の国々とは異なった展開を見せる。14 世紀に上座仏教が伝わったとされるラオスは、17 世紀にルアンプラバン、ビエンチャン、チャンパーサクの三国に分裂し、その後の戦乱などで仏教は衰退した。その結果、土俗性を帯びた仏教が蔓延し、一部の僧は教義やパーリ語を学ぶためタイに留学するなどカンボジアと同様の傾向が見られた〔Kourilsky & Ladwig 2018: 225〕。19 世紀末、タイからラオス三王国の宗主権を奪ったフランスは、仏教の復興に取り組んだ。カルプレスはビエンチャンに仏教研究所を設立し、カンボジアと連携した仏教復興に協力している。また、ラオス国内にも仏典をラオ文字で表記することを唱えたマハー・シラー（1905-1987）のように仏教を改革しようとする僧が現れた〔矢野 2008: 28-31〕。1953 年、独立を果たしたラオス王国は政治的混乱が続いた結果、その影響はサンガにも及び、僧が政治との関係を強めた。更に、社会主義政権に移行するとサンガは社会における積極的な役割を求められるようになっていった〔Ladwig 2015: 5〕。

保護国時代のカンボジアとラオスは、フランスによる政策的恩恵を受けたという点でタイや植民地下ミャンマー、スリランカの仏教復興過程とは根本的に異なる。また、これらの国の仏教復興過程において、カルプレスのような外国人と現地仏教僧の協働はみられない。更に、フランスはイギリス植民地のようにキリス



ト教の布教に関して積極的な優遇策を講じることはなく、プロテスタントと異なりフランス・カトリックは純粋な布教活動に徹したため、住民から軽蔑や反感の感情を抱かれることもなかった。何よりカンボジアでは、人々の生活に深く根付いた仏教をキリスト教に改宗させることは不可能に近い状況であった [キン 2019: 218]。

また逆に、プロテスタントの強力な布教の影響を受けたスリランカやミャンマーの場合とは異なり、カンボジアやラオスで在家による目立った仏教復興運動の広がりは見られない。カンボジアでは在家による仏教徒協会が設立されるものの [坂本・岡田 2019: 618; 760]、入会の呼びかけからは独自の社会活動や宗教活動への関心よりも、宗派を問わず結束してサンガ内部の対立を融和し、団結して仏教を繁栄させようという意識が読み取れる。『ナガラワッタ』がたびたび訴えているように [坂本・岡田 2019: 222; 314; 343]、この当時カンボジア仏教徒はトアンマユット派とモハーニカーイ派、モハーニカーイ派内部の新仏法派と旧仏法派の対立を憂慮し、仏教徒が心を一つにすることを願っていたのである。また、カンボジアにおいてナショナリストたちが表立った活動を始めるのは 1940 年代に入ってからのものである<sup>32</sup>。仏教研究所の職員であったソン・ゴク・タン<sup>33</sup>(1908-1976) は伝道活動に従事する一部の僧たちに思想的影響を与えたが、チュオン・ナートやフオト・タートなど新仏法派の中核的僧たちがナショナリストに同調することはなかった<sup>34</sup>。

他国の仏教復興や変革運動とカンボジア仏教復興における特徴との唯一の共通点は、三蔵經典への回帰と土着宗教的な実践を排除した合理的な仏教の確立である。仏教復興の原点といえるこの思想は、カンボジアでは特に仏典の内容理解とクメール語への翻訳に重点を置いたことにより、カンボジア人が母語で教理を理解できる国民の宗教としての仏教を形作っていくことになる [Edwards 2004: 64]。また、カンボジアの仏教復興はカルプレスの思想と新仏法派の仏教変革思想とが結びついてその力強い流れを作り出したという点で特徴的である。フランス人とカンボジアにおける知識

人としての僧たちが協働して仏教の復興に邁進したことは、サンガ内部の反植民地感情を一定程度和らげる効果を生み出したとも考えられる<sup>35</sup>。

## 4.2 大衆を教え導く上座仏教へ

上座仏教では一般的に出家者は自らの解脱を目指す修行にのみ専念し、在家に対する仏教教理の伝道には消極的だといわれてきた [浪花 1987: 3]。また、パーリ語三蔵は主に一部の出家経験者にしかその内容を理解できなかった。しかし、仏教復興運動の進展はカンボジア仏教をサンガの外に向けて伝道する仏教へと変化させた。パーリ語仏典のクメール語への翻訳によって仏教の教えを広めることは仏教変革運動の基本的な目標であり、新仏法派の僧たちはそのために様々な努力を重ねている。まず、彼らは仏典筆写と翻訳の必要上クメール語正書法標準化<sup>36</sup>のため辞典編纂の必要性をジョルジュ・セデスに説き、その結果 1915 年、国王布告によってクメール語辞典編纂委員会が立ち上げられたことはその第一歩である [Cœdès 1938: 315]。その後、新仏法派を中心に構成された委員会によって国語辞典の編纂が進められていった。次に、チュオン・ナートとフオト・タートは EFEO に留学した際、院長のルイ・フィノーにカンボジアにおいて仏教書の自由な出版が許されない不合理性を訴え、その自由化への道を開いている [Huot 1970: 53]。

また当初、翻訳仏典の対象読者はパーリ語を理解できない僧たちであったが、徐々にその対象は一般の人々に広がり、仏教書の自由な発行は彼らにとっての重要な課題となった。彼らは、『カンプチア・ソリヤ』に仏教の教理解説を掲載し、更に在家にとっての基本的な教えに関する經典を編集して発行しはじめている<sup>37</sup>。また、經典の読誦に際しパーリ語のあとにクメール語の訳を加え、在家信徒に対しても同様の方法を勧めるなど新しい実践様式を広めた [Oum 1927: j]。

1932 年に発行されたチュオン・ナートによるパーリ語文法書 *Kaccāyanūpatthamubhak* (カッチャーヤナ解説書) は高等パーリ語学校の教科書とされていたも

のを、仏典を読もうとする一般学習者の増加に伴い王立図書館が急ぎ編集させたものである [Chuan 2001: 14]。更に、カルプレスが重視した国語辞典は、編纂開始から 23 年後の 1938 年に上巻が王立図書館から刊行され、下巻は 1943 年に仏教研究所から発刊<sup>38</sup>された。その編纂責任者は新仏法派の中核比丘チュオン・ナートであり、彼は辞典の中にも仏教の教えを多く取り入れた<sup>39</sup>。この辞典でパーリ語仏教用語の意味が解説<sup>40</sup>されたことは、在家の人々の仏典理解を大いに助けたことであろう。更に、パーリ語をクメール語に訳し仏典の内容理解を進めることによって仏教の教えを広めようとする活動は、三蔵の翻訳という究極的な目標へと向かった。

また、フオト・タートは兵隊の駐屯地や刑務所を訪問し、軍人や囚人に対し仏教の教えを守って正しく生きるように説教活動をおこなった。この説教にはカルプレス自ら同行している。これらの行いに対しモハーニカーイ派内部で、三蔵翻訳やさまざまな伝道活動は逆に仏教の衰退であるという批判が巻き起こり、それはカルプレスに集中したという [Chheat et al: 2005: 24]。伝統的な上座仏教では、戒律日や仏教行事に信徒が寺院に赴き自らの善徳を積むことが一般的であった。僧が刑務所に出向いて説教するなどは当時の慣行からすれば異常な行いであると考えられても不思議ではない。それに関わらず、批判に負けず彼女と新仏法派の僧が伝道活動を続けていったことは、彼らがこの活動に使命感を帯びて臨んでいたからに他ならない。

そのような思想を貫き通して僧たちを感化し、カンボジア仏教に新しい風を送り込み続けたカルプレスは、第二次世界大戦下ヴィシー政権によるユダヤ系フランス人の排斥政策により王立図書館と仏教研究所の職を解かれ、1941 年にカンボジアを去ることとなった。この年、カンボジア国王はシハヌークに変わり、第二次世界大戦の影響<sup>41</sup>がカンボジアに及び始めると伝道する姿勢を持つ僧たちにも変化が表れる。当時、軍人への説教を担当したのは主に高等パーリ語学校の教師たちであった。その教師の一人がハエム・チアウ

(1898-1943)<sup>42</sup>である。彼は高等パーリ語学校で優秀な成績を修めチュオン・ナートに認められて同校教授として採用され、三蔵委員会のメンバーにも選ばれた比丘である。社会的な問題にも目を向けた彼は、ソン・ゴク・タンなどのナショナリストと交流を持ち思想的な影響を受けて軍人たちへの説教で反フランスを唱えるようになった。過激な発言に危険を感じた高等弁務官が、彼を僧衣のまま逮捕し投獄したことが僧たちの反感を買った。ソン・ゴク・タンが彼の釈放を求めるデモを組織したことにより、1942 年 7 月 20 日、多くの僧が参加してフランス高等弁務官府に押しかける「傘の戦争」<sup>43</sup>を起こしたのである [Bunchan 1982: 115-126]。

この直後、デモに参加した多くの僧が逮捕され高等パーリ語学校や仏教研究所は危険分子の拠点とみなされ活動を制限された [Chheat et al 2005: 34]。この事件ではカルプレスの影響を最も強く受けた新仏法派の中核メンバーは沈着冷静な態度をとっている。そのことは連邦政府とカンボジア王国政府に彼らへの信頼感を与えたのであろう。チュオン・ナートはこの事件の直後に高等パーリ語学校校長に就任し、1944 年にはウナローム寺住職、1945 年には高僧会議議長に選任された後、1948 年にはモハーニカーイ派管長に就任するなど、着々とサンガ内で地位を高めカンボジア仏教のその後の変容に関与していくこととなるのである。

更に、彼ら新仏法派は、伝道姿勢を明確に打ち出し、人々に語りかける活動を活発化した。1942 年に彼らは、当時普及しはじめたラジオ放送<sup>44</sup>を用いてより広範に伝道する試みも始めた。このラジオ・カンボジアの放送では、フオト・タートは第一話で「仏教は何を教え、仏教を学ぶことによって何を心得るか」、ルヴィー・アエムは第二話で「八正道、正見によって得る徳目」について、チュオン・ナートは第三話で「親、師、国王の恩と感恩」について説いた<sup>45</sup>。この説法でフオト・タートは、仏法を真剣に学び実践するものはだれでも涅槃に至ることができるとして、仏教の教えは人々のためにあるという解釈を示している。

また、1950 年には国民一般に仏教教理を説くため

制度として各寺院に「律学校」を開設するよう宗教省から通達された [Buddhasāsanapaṇḍity 1956: 95]。カンボジアがフランスから完全独立を果たした後に制定された新憲法でも仏教は国教と規定され、国民の宗教として公認された<sup>46</sup>。人々を教え導く伝道の姿勢を強めた仏教は、このようにしてカンボジア社会の中に着実に定着していくことになるのである。

## おわりに

カルプレスはカンボジアのルネサンスにとって必要と思われることを大胆に実行した。彼女には洞察力があり、自らが信じることに對して何ものも恐れず正面突破する信念と行動力があつた。それらの力は王立図書館と仏教研究所を生み出し、彼女はこれらの機関と高等パーリ語学校を知識センターと位置づけ、有機的に結び付けて仏教復興を進めている [Karpelès 1933a: 73]。それらの機関を拠点として実働したのは新仏法派の僧たちであつたが、彼女は女性との距離を戒律で厳しく制約される彼らに敬愛され、共に力を合わせてカンボジア仏教の復興と変革を前進させた。

それを可能にした背景には、これまで述べてきたようなカルプレスの情熱や信念に裏付けられた行動だけではなく他にもいくつかの要因が考えられる。まず、新仏法派の僧たちに一目置かれるほど深い学識を備えた学者であつたということであろう。彼女は高等研究実習院においてルイ・フィノーやシルヴァン・レヴィ (Sylvain Lévi 1863-1935)、アルフレッド・フーシェ (Alfred Foucher 1865-1952) など著名な学者の指導を受け大乘仏教に関する知識も豊富であつた [Filliozat 1969: 1]。また、フェミニストを自任<sup>47</sup>する彼女はジェンダーに囚われない実行力や政治力の持ち主でありながら、僧と視察旅行をするときなどは乗り物、宿舎、食事を全く別にするなど上座仏教僧に対する敬虔な態度を守り、仏教の教えを尊重しようとする人であつた [Chuon 1936a, Huot 1927a;b;c;d]。更に、あるフランス人記者が、彼女は剃髪僧衣の姿でこそないが仏教に対する姿勢は聖職者そのものであると報じているが

[Goodman 2018a: 238]、このことは彼女が高位の尼僧のように毅然とした態度と威厳の持ち主であつたことを物語っている。

1941年3月8日、ルヴィー・アエム、チュオン・ナート、フォト・タートなど同志ともいえる僧や彼女とともに働いてきた人々が、王立図書館に参集して彼女との別れを惜しんだ。その時フォト・タートは送別のスピーチにおいて彼女の特筆すべき功績として、散逸していた仏典を収集したこと、人々のために仏教書や様々な書籍を出版したこと、三蔵のクメール語翻訳を指揮し希望を持たせて推進したこと、各国からさまざまな本を購入し王立図書館の蔵書としたことの四点を上げ、カルプレスがカンボジア仏教とカンボジア人に多くの財産を残してくれたことに深く感謝した。更に、彼は次のように語り、彼女への惜別の気持ちを素直に表現している。

計り知れない恩義は私たちに女史への限らない敬慕の情を抱かせます。それは必ず女史と私たちをこれからも結び付けることでしょう。ここに集まった私たちは、惜別の念を禁じえません。私たちは女史の恩義を一生忘れず、女史が築かれた事業を守り将来も繁栄させるように努力いたします。更に、女史の業績が失われないように、そして後世の若者たちが女史のお名前を記憶しておくように本に編集して残します [Nagaravatta 1941:1]。(筆者試訳)

このスピーチからカルプレスと新仏法派の僧たちの強い絆を感じることができる。別離に際して己の感情を吐露するということは、執着を離れようとする上座仏教の高僧らしからぬ態度であるが、それは、カルプレスが掲げた尊敬や愛という思想が僧たちの心に確実に植え付けられていたことの証左であり、また、人間味に溢れた現代的上座仏教僧の姿を現しているともいえる。

カルプレスがカンボジアを去った後、フォト・タートの言葉どおり彼らは彼女の財産を守るべく努力を続けた。しかし歴史が示す通り、カンボジア仏教はボル・



ポト政権によって壊滅的な打撃を受け、そのためにカルプレスの業績をまとめた本の出版も実現することはなかった。彼女の没後のことではあるが、ポル・ポト政権が倒れた後、悲惨な状態にあったカンボジア仏教の復興に手を貸したのは、彼女が特に気にかけてコーチシナのカンボジア仏教僧たちである [小林 2009: 40]。彼女は、「(コーチシナの) カンボジア民族は土地を奪略され服従を迫られても屈せず、固有の文化を守り通した。」と述べ、民族的見地<sup>48</sup>から仏教研究所の活動範囲をこの地まで広げた経緯がある [Karpelès 1933: 71]。そこで守られてきたカンボジア仏教が、本家の仏教の再復興を助けることになるとは彼女自身想像もしなかったにちがいない。このように、彼女が全身全霊を捧げたカンボジアの文化の振興と仏教の復興にかけた情念は、あるものは形となって残され、あるものは人びとの心の中に伝えられ、そしてあるものは仏教の中に生き続けたのである。カルプレスは多くを語らずカンボジアを去り、インド・ボンディシェリー<sup>49</sup>のシュリ・オーロピンドのアシュラム<sup>50</sup>でフランス語とフランス文学を教え、仏教の研究を続けている [Filliozat 1969: 3]。

その後、カンボジアを取り巻く情勢は大きく変化し

始めた。シハヌークが国王に即位するとチュオン・ナートは国歌<sup>51</sup>の作詞を依頼されている。彼は、近代国民国家カンボジアの理想は即ち、国王の元で仏教を信奉する国民が築く国家の繁栄にあることを詠い、国の基盤が仏教であることを国民に印象づけた。第二次世界大戦が終結するとカンボジアは独立へと向かい、仏教は国家を代表する宗教へと変身した。また、完全独立後の新憲法で仏教は国教として国家の保護が約束されるとともに、倫理教育や精神浄化などの役割を担って社会に貢献する宗教となることが求められるようになった。

このような仏教の公認には政治的思惑が絡んでいるように見える<sup>52</sup>。しかしそれは、個人の幸福と安寧或いは解脱にとっての頼みであった仏教が、社会に積極的に関与しようとする宗教へと変化した姿であるともいえる。同時にそのことは、カンボジアのルネサンスに情熱を傾けたシュザンヌ・カルプレスと、自己変革した上座仏教僧たちによる仏教復興の活動が人々に視点を向けた仏教への質的変容を促し、カンボジア仏教を彼女が思い描いた「社会の維持に必要な強い倫理的な力」に昇華させたことの傍証であるとしてもよい。

#### 注

- 1 カンボジア仏教は歴史上二度の復興を経験したといえる。最初は 1431 年頃アユタヤ軍の攻撃によってアンコール王都が放棄され、仏教僧や仏典が掠奪されて以降衰微していった仏教からの復興、二度目は 1975 年 4 月から 1979 年 1 月にかけてのポル・ポト体制による仏教壊滅からの復興である。本稿で扱う仏教復興は前者を指す。
- 2 タイのモンクット王に願ってカンボジア出身僧パンを帰還させ、タイに倣って戒律に厳しいトアンマユット (dhammayutti) 派を興させた [キン 2019: 199]。また、ティアンには従来の仏教であるモハーニカーイ (mahānikāy) 派の復興を託した [Li 2004: 2]。
- 3 1887 年に成立したベトナム、カンボジア、ラオスを包含する仏領インドシナ連邦の政府。
- 4 上座仏教の聖典三蔵は、僧が守るべき規律の集成である律蔵、ブッダのことばとしての教説を集成した経蔵、その教説に関する教理的な分析、研究、理論化が記された論蔵から成る。
- 5 カンボジア語はクメール語とも呼ばれる。本稿では、言語についてはクメール語、国名、国民にはカンボジア、カンボジア人を使用する。
- 6 1881 年に設立された The American Association of University Women (AAUW) の機関誌。
- 7 ドイツ語の聖書がドイツ語の標準化を進め [金子・江口 2008: 33]、自国語の聖書で教義を説いたことが宗教の民衆化につながった [梅棹 1989: 260]。カンボジアでもクメール語への仏典翻訳は正書法の標準化



や一般大衆への教義の伝道に寄与した。

- 8 従来の上座仏教は、涅槃を目指す出家者と現世利益を求める在家者のための二重構造の宗教 [石井 1969: 172] といわれる。
- 9 1926 年、王立図書館から発刊された雑誌で、当初は仏教関連記事を多く掲載したが、その後は視察レポート、歴史、文学など幅広いテーマを記事にした。
- 10 1939 年 11 年度第 10 号に掲載。
- 11 1932 年～1933 年に動植物、農業、工業、カンボジア、ベトナムの町の様子などの記録映画 81 本の上映を計画した [Karpelès 1933b]。
- 12 クメール王朝の衰退以来タイ、ベトナムの侵略を受け続け、その後も戦乱が続いた。
- 13 19 世紀中葉、後のラー 4 世が出家時代に興した戒律に厳しい宗派。タマユット (タイ語発音) 派に対し、伝統的仏教宗派はモハニカイ派と呼ばれた。
- 14 上座仏教経典の経蔵小部に収められるブッダの前生物語。547 話があり、1 話が現世の物語、過去世の物語、結びで構成される。
- 15 一部の物語には聴衆を楽しませるため本来の仏典には記載のない挿話が増えられていた [Huot 1970: 17]。
- 16 同誌編集者によると、この記事はフランス語からの翻訳で一部省略されている [Karpelès 1933a: 71]。
- 17 一般的に在家信徒に向けた説教では、出家者が学ぶ仏教の教理よりも積徳と五戒の順守が説かれた [Edwards 2007: 100]。
- 18 週刊新聞『ナガラワッタ』には休暇で一時帰国していた彼女がカンボジアに戻ったことを喜び、また、彼女の活動を称賛する記事が見られる [坂本・岡田 2019: 3; 376; 708]。
- 19 フランスの直轄植民地とされた、メコンデルター帯を含むベトナム南西部。当時 30 万人以上のカンボジア人が住み、現在もカンボジア人は同地域をカンブチア・クラオム (低地カンボジア) と呼ぶ。
- 20 この要請の背景には新興宗教カオダイ教の急激な広がりへの警戒感があったと考えられる。1926 年にベトナム南部で創始されたこの新興宗教に入信するカンボジア人が当時急増していた [Edwards 2007: 200]。
- 21 クメール文字はムール文字系とチュリエン文字系に大別される。ムール文字は仏典、印刷物に使われ、チュリエン文字は一般の印刷物に使われる [峰岸 1988: 351]。
- 22 初等教育制度として 1924 年以降普及した。フランス式訓練を受けたカンボジア人僧を教員としカンボジア語での授業をおこなった。1930 年には全国 53 校に 2,386 人が在籍し、その後普及した [平山 2011: 221]。
- 23 1928 年 1 月 18 日～2 月 18 日にかけて、ほぼ毎日 2～4 寺院を視察している。
- 24 1927 年の『カンブチア・ソリヤ』に 1928 年の記事が見えるのは、毎月発行予定であった同誌の印刷に遅れが続いたことが原因と考えられる。その調整のため 1929 年度版は欠刊となっている。
- 25 フランス式教育を施したフランス学校と思われる。
- 26 カルプレスは 1931 年 5 月 31 日と記録しているが、仏教研究所小史では公式開所日は 1930 年 1 月 25 日とされている [Chheat et al 2005: 22]。また、ハンセン [2007: 150] は 1930 年 5 月 31 日、エドワーズ [2007: 203] は同年 5 月 12 日としている。1930 年の BEFEO にカルプレスによる仏教研究所設立の記述があることから開設年度は 1930 年であろう。
- 27 図書館車の定期運行、各種書籍販売 [Karpelès 1933a: 74]、各種記録映画の上映 [Karpelès 1933b]、海外のラジオ放送紹介 [坂本・岡田 2019: 176] などをおこなった。
- 28 当時パリ語の写本そのものに聖性があると考えられていた [Edwards 2007: 106]。また、1918 年ごろチュオン・ナートやフオト・タートの著書が新しく作られた経典として不許可になったように [Huot 1970: 23]、聖典はパリ語三蔵のみとする保守派には翻訳に対する抵抗感が根強かったと考えられる。
- 29 彼は改革派を「タマユット (法を守る者)」と名付けた [石井 2003: 276]。
- 30 欲界・色界・無色界の状態が記された『三界経』はトライプームと呼ばれ庶民に浸透していた [石井 2003: 207]。この経典はスコタイ王リタイ (在位 1354-1376) の作とされる [彦坂 2013: 87]。
- 31 1958 年、教師であったアリヤラトネが生徒とともに低カーストの人々のために奉仕したことに始まり、自発的な労働奉仕によって地域社会に貢献する運動として広がった [ゴンブリッチ、オバーセーカラ 2002: 365-377]。
- 32 カンボジアにおける民族解放運動の不活発の要因として、学校教育、工業化の遅れから知識人、労働者の

- 層が薄かったことが指摘される [四本 1999: 2]。
- 33 王立図書館や仏教研究所職員を務め、パイ・チューンなどと週刊新聞『ナガラワッタ』を発行した。
- 34 カルプレスはナショナリストとサンガのリーダーを結び付けた [Chandler 1996: 163]。しかし、彼らは協調の姿勢を取らなかった。
- 35 1925 年、徴税に赴いた弁務官バルデスが農民に惨殺された事件はインドシナ連邦政府の神経を尖らせたが、その後カンボジア国内では 1942 年の「傘のデモ」まで目立った反フランス運動は起きていない。
- 36 クメール語はパーリ語、サンスクリット語からの借用語が多く、現在でも正書法に関する議論がある [上田・岡田 2014: 39]。当時は正書法の基準になるものがなかった。
- 37 1927 年に、ウム・スーとチュオン・ナートの共著で仏・法・僧への帰依と在家の日常の実践の手引書『在家の実践』、在俗の実践倫理がまとめられたフォト・タート著の『シンガーラ経』などが出版された。
- 38 王立図書館は 1942 年に仏教研究所と合併した [Chheat et al 2005: 33]。
- 39 例えば、パーリ語「*parābhava* 破滅」の用例「女遊び、飲酒、賭け事（つまり、無法無知の行い）にふける人間には財産は残らず必ず破滅に陥る。そのような行いを破滅の主という。」のように単に見出し語の説明だけではなく、仏教の教えを説く用例が他にも多く見られる。
- 40 *Saddānukuraṃ brah̥ buddhasāsanā* (仏教用語集) [Sum 2013] の見出し語 6,587 語のうち約 71% に当たる 4,662 語が『クメール語辞典』の正・副見出し語と重複する。(筆者調べ)
- 41 1941 年、カンボジア、ラオス、コーチシナに日本軍の進駐が始まった。
- 42 彼は死刑を宣告され、その後終身刑に減刑されたが 1943 年に獄死した。
- 43 デモ参加者の半数以上はウナローム寺とランカー寺の僧で、彼らは黄色い傘を持っていたことからこの名前で呼ばれる。このときソン・ゴク・タンは日本軍と連絡をとっていた [Bunchan 1982: 118]。
- 44 カンボジアでは 1937 年にニュース放送が開始された [坂本・岡田 2019]。
- 45 それぞれ出演者が異なる 14 話の放送内容は『カンプチア・ソリヤ』に掲載された。
- 46 民主カンプチア憲法 (1976 年) とカンプチア人民共和国憲法 (1981 年) を除き、その後のカンボジアの憲法では仏教を国教と制定している。
- 47 彼女はフランス女性全国評議会 (Conseil National des Femmes Françaises)、国際婦人連合 (International Council of Women) の会員であり、「仏教研究所の設立はフェミニズムの観点から大勝利であった。」と述べるなど [Goodman 2018a: 237] フェミニストとしての自覚に立って活動していた。
- 48 ユダヤ系という彼女の原点がフランス領コーチシナへの特別の感情を与えた節がある [Edwards 2007: 188]。
- 49 少女時代インド・カルカッタで過ごした経験があり [Dutta & Robinson 1997: 449]、彼女にとってインドは無縁な土地ではない。
- 50 ヒンズー教の道場。同アシュラムのグルは、彼女はボンディシェリーに來た時、既に仏教徒であったと述べている [Edwards 2007: 189]。
- 51 1993 年、「ノコー・レアチ (都の王)」は改めて現国歌として制定された。
- 52 1947 年制定の憲法案は僧や知識人層の支持を受けた民主党主導で策定された [オズボーン 1996: 60; 四本 1999: 3]。また、国王を退位したシハヌークは 1955 年に「人民社会主義共同体 (サンクム・リア・ニヨム)」を結成し、王制、独立維持、仏教を基本とした政策を掲げて政治活動を開始している。

## 参考文献

## 〈日本語文献〉

- 生野善應. 1981. 「シュエジン派の成立—再生ビルマ上座部の一形態—」『アジア研究所紀要』8. pp. 151-186.
- 石井米雄. 1969. 『戒律の救い—小乗仏教』. 京都. 淡交社.
- . 2003. 『上座部仏教の政治社会学』. 東京. 創文社.
- 上田広美、岡田知子. 2014. 『カンボジアを知るための62章』. 東京. 明石書店.
- 梅棹忠雄. 1989. 『比較文明学研究』. 東京. 中央公論社.
- オズボーン、ミルトン. 1996. 『シハヌーク：悲劇のカンボジア現代史』石澤良昭監訳・小倉貞男訳. 東京. 岩波書店.
- 金子晴勇・江口再起編. 2008. 『ルターを学ぶ人のために』. 京都. 世界思想社.
- 川島耕司. 2006. 『スリランカと民族』. 東京. 明石書店.
- 金 漢益. 1995. 『キリスト教か仏教か—歴史の証言—』F. Katukolihe 著 *Pānadurā Vadaya, The Panadura Controversy*, 1948 Lankaputhra 出版社, Colombo 全訳. 東京. 山喜房佛書林.
- キン・ソック. 2019. 『カンボジア近世史—カンボジア・シャム・ベトナム民族関係史(1775-1860年)』石澤良昭訳. 東京. めこん.
- 藏本龍介. 2015. 「ミャンマーにおける仏教の展開」『静と動の仏教』奈良康明、下田正弘編. 東京. 佼成出版社.
- 小林 知. 2009. 「ボルボト時代以降のカンボジア仏教における僧と欲」『＜境域＞の実践宗教—大陸部東南アジア地域と宗教のトポロジー』林 行夫編. 京都. 京都大学学術出版会.
- ゴンブリッチ、リチャード、ガナナート・オバーセーカラ. 2002. 『スリランカの仏教』島 岩訳. 京都. 法蔵館.
- 坂本恭章. 2001. 『カンボジア語辞典上・中・下』. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語研究所.
- . 岡田知子. 2019. 『ナガラワッタ』上田広美編. 東京. めこん.
- 笹川秀夫. 2006. 『アンコールの近代—植民地カンボジアにおける文化と政治』. 東京. 中央公論新社.
- 島 岩. 1998. 「西欧近代との出会いと仏教の変容：仏教の未来に関する一考察」『北陸宗教文化』第10号. pp. 1-30.
- 調 邦行. 2019. 「カンボジア王立図書館及び『カンプチア・ソリヤ』の仏教変革運動における役割」『言語・地域文化研究』第26号. pp. 193-209.
- シルベストル・A. 2019. 『カンボジアの行政』坂本恭章訳、上田広美・岡田知子編. 東京. めこん.
- 土佐桂子. 2000. 『ビルマのウェイザー信仰』. 東京. 勁草書房.
- . 2002. 「新宗教運動の台頭—社会変動と宗教再生の動き」『「開発」の時代と「模索」の時代』末廣昭責任編集. 東京. 岩波書店. pp. 311-337.
- 浪花宣明. 1987. 『在家仏教の研究』. 京都. 法蔵館.
- . 2003. 「シンガーラへの教え 善生經」『原始仏典第三卷 長部經典Ⅲ』中村元監修、森祖道、浪花宣明編集. 東京. 春秋社.
- 萩原修子. 2012. 「カオグイ教」『世界宗教百科事典』. 世界宗教百科事典編纂委員会編. 東京. 丸善出版.
- 彦坂千津子. 2013. 「王の出現—タイ『三界經』と他の仏教經典との比較—」『パリー学仏教文化』27号. pp. 67-87.
- 平山雄大. 2011. 「カンボジアにおける初等教育開発の歴史的展開①—学校教育の導入と拡大(1958年以前)—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊19号-1. pp. 215-226.
- 峰岸真琴. 1988. 「クメール文字」『言語学大辞典』亀井 孝、河野六郎、千野栄一編. 東京. 三省堂. pp. 349-357.
- 四本健二. 1999. 『カンボジア憲法論』. 東京. 勁草書房.
- 矢野順子. 2013. 『国民語の形成と国家建設：内戦期ラオスと言語ナショナリズム』. 東京. 風響社.

## 〈欧米語文献〉

- Bunchan Mul. 1982. The Umbrella War of 1942. in *Peasants and Politics in Kampuchea, 1942-1981*. edited by Ben Kiernan and Chanthou Boua. London. Zed Press.
- Chandler, David. 1991. The Tragedy of Cambodian History: Politics, War, and Revolution since 1945. Yale. Yale University.
- Chheat Sreang, Yin Sombo, Seng Hokmeng, Pong Pheakdeyboramy, Saom Sokreasey. 2005. *THE BUDDHIST INSTITUTE A Short History*. edited and translated by Penny Edwards. Phnom Penh. Buddhist Institute.

- Cœdès, Georges. 1915. Note sur les ouvrages pâlis composés en pays thaï. in *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient*, Tome 15, 1915. pp. 39-46. Persee. 2005-2020. Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient-Persée. Accessed on June 15, 2020. [www.persee.fr/collection/befeo](http://www.persee.fr/collection/befeo).
- . 1938. Dictionnaire cambodgien, T1. K-M. in *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient*, Tome 38. 1938, pp. 314-321. Persee. 2005-2020. Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient-Persée. Accessed on May 25, 2017. [www.persee.fr/collection/befeo](http://www.persee.fr/collection/befeo).
- Dutta, Krishna & Andrew Robinson. 1997. Selected letters of Rabindranath Tagore. Cambridge, Cambridge University Press.
- Edwards, Penny. 2004. Making a Religion of the Nation and Its Language-The French protectorate (1863-1954) and the Dhammakāy, Ch1-2. in *History, Buddhism, and New Religious Movement in Cambodia*, edited by John Marston and Elizabeth Guthrie. Honolulu. University of Hawai'i Press.
- . 2007. *Cambodge: The Cultivation of a Nation, 1860-1945*. Honolulu. University of Hawai'i Press.
- Filliozat, Jean. 1969. Suzanne Karpelès. in *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient*, tome 56. pp. 1-3. Persee. 2005-2020. Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient-Persée. Accessed on May 15, 2018. [www.persee.fr/collection/befeo](http://www.persee.fr/collection/befeo).
- Goodman, Joyce. 2018a. Suzanne Karpelès (1890-1969): thinking with the width and thickness of time. in *Bildungsgeschichte. International Journal for the Historiography of Education* 2-2018. pp. 231-244.
- . 2018b. The Buddhist Institute at Phnom Penh, the International Council of Women, and the Rome International Institute for Educational Cinematography: intersections of internationalism and imperialism, 1931-1934, in *History of Education*, 47: 3. pp. 415-431. History of Education. Accessed on May 29, 2020. <https://doi.org/10.1080/0046760X.2018.1425740>
- Hansen, Ann Ruth. 2007. *How to Behave*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Karpelès, Suzanne. 1933a. Renascence in Cambodia, in *Journal of the American Association of University Women*. June 1933. pp. 71-74 (The file of the AVG-Carhif, Karpelès\_1932Aug\_1932Sept).
- . 1933b. Liste des films de cinéma projetés dans les divers centres au Cambodge par l'Institut Buddhique (The file of the AVG-Carhif, Karpelès\_1933Aug\_1933Oct).
- Khing Hoc Dy. 2006-2007. "Suzanne Karpelès and the Buddhist Institute". in *Sikṣācakra* 55 No. 8-9, Center for Khmer Studies. pp. 189-191. Sikṣācakra. Accessed on May 18, 2017. <https://khmerstudies.org/publications/siksacakra-journal-of-cambodia-research/>
- Kourilsky, Gregory & Patrice Ladwig. 2018. Governing the Monastic Order in Laos: Pre-Modern Buddhist Legal Tradition and Their Transformation under French Colonialism. in *BUDDHISM, LAW & SOCIETY* 3. 2017-2018. Governing the Monastic Order in Laos: Pre-Modern Buddhist Legal Tradition and Their Transformation under French Colonialism. Accessed on May 30, 2020. [https://www.academia.edu/38090207/Governing\\_the\\_Monastic\\_Order\\_in\\_Laos\\_Pre-modern\\_Buddhist\\_Legal\\_Traditions\\_and\\_Their\\_Transformation\\_under\\_French\\_Colonialism](https://www.academia.edu/38090207/Governing_the_Monastic_Order_in_Laos_Pre-modern_Buddhist_Legal_Traditions_and_Their_Transformation_under_French_Colonialism)
- Ladwig, Patrice. 2006. Modernization, Social Activism and The Lao Buddhist Sangha 1. Accessed on May 30, 2020. [https://www.eth.mpg.de/3466688/Ladwig\\_-\\_Between\\_cultural\\_EFEO\\_-\\_draft.pdf](https://www.eth.mpg.de/3466688/Ladwig_-_Between_cultural_EFEO_-_draft.pdf)
- Persee. 2005-2020a. Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient. Chronique. in *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient*. Tome9. 1909. pp. 823-827. Accessed on June 15, 2017. <http://www.persee.fr/collection/befeo>.
- . 2005-2020b. Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient. Chronique. in *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient*. Tome14, 1914. p. 95. Accessed on June 15, 2017. <http://www.persee.fr/collection/befeo>.

〈クメール語文献〉

- Buddhasāsanapaṇḍity. 1956. Bidhī qṇusaṃvaccharā mahāsannipāt loek dī 12 nai mantrisaṅgh saṃrāp chnaṃ 1956. in *Kambujasuriyā*. chnaṃ 28 khæ makarā lekh 1. pp. 79-100. (仏教研究所. 「1956年第12回定例高僧大会議」『カンブチア・ソリヤ』. 28年度1月第1号) haotrai. kambujasuriyā. 2020年5月5日アクセス. [www.haotrai.com/kh/ឥឡូវកម្ពុជា ស៊ីរីយ៉ា](http://www.haotrai.com/kh/ឥឡូវកម្ពុជា ស៊ីរីយ៉ា) (Gambīrakambujāsuriyā)-35.
- Chuoṇ Nāt. 1927. Gihivāṇy saṅkhep. in *Gihipatipatti*. Phnom Penh. Buddhasāsanapaṇḍity. reprint, 1997 (「在家戒律概説」『在家の実践』. 仏教研究所)
- . 1936. Parivaṭṭagamanāgam ṭaṃnoer qāntuoraṇer knuñ ṭaen Kūsāṃṇsīn secaktī sarupp. in *Kambujasuriyā*. chnaṃ



- dī 8 khsae dī 12. Phnom Penh, Brah rājapaṇṇālāy, pp. 159-177. (チュオン・ナート, 1936. 「コーチシナ紀行まとめ」『カンブチア・ソリヤ』, 8年度第12号)
- . 1942. Vidyudhammadesanā kaṇḍ dī 3. in *Kambujasuriyā*. qṭthapad kpāl dī 1 chnam dī 14 khsae dī 8. pp. 3-11. (「ラジオ説法第3話」『カンブチア・ソリヤ』, 14年度第1巻第8号) haotrai. kambujasuriyā. 2020年5月5日アクセス. [www.haotrai.com/kh/ឥឡូវកម្ពុជាស៊ីរីយ៉ា](http://www.haotrai.com/kh/ឥឡូវកម្ពុជាស៊ីរីយ៉ា) (Gambīrakambujāsuriyā)-35.
- . 1967. Vacanānukram *Khmaer*. bhāg dī 1 bhāg dī 2. Phnom Penh. Buddhasāsanapaṇḍity. (『クメール語辞典第1巻・第2巻』, 仏教研究所)
- . 2001. *Kaccāyanūpatthambhak*. Phnom Penh. Buddhasāsanapaṇḍity. (『カッチャーヤナ解説書』, 仏教研究所)
- Huot Tāt. 1927a. Rāyakāraṇ° qambī dau binity vatt Khmaer knuñ khett Kūsāṃṇsīn. in *Kambujasuriyā*. qṭthapad kpāl dī 2 chnam dī 2 khsae 7. pp. 545-569. (「コーチシナにおけるカンボジア仏教寺院視察報告」『カンブチア・ソリヤ』, 2年度第2巻第7号) haotrai. kambujasuriyā. 2020年5月10日アクセス. [www.haotrai.com/kh/ឥឡូវកម្ពុជាស៊ីរីយ៉ា](http://www.haotrai.com/kh/ឥឡូវកម្ពុជាស៊ីរីយ៉ា) (Gambīrakambujāsuriyā)-35.
- . 1927b. Secaktī rāyakāraṇ° qambī taṃnoer dau knuñ taen Kūsāṃṇsīn camboah khaetr tael mān vatt lok saṅgh Khmaer. in *Kambujasuriyā*. qṭthapad kpāl dī 2 chnam dī 2 khsae dī 8. pp. 616-635. (「カンボジア人の僧がいるコーチシナのカンボジア仏教寺院視察報告」『カンブチア・ソリヤ』, 2年度第2巻第8号) haotrai. kambujasuriyā. 2020年5月5日アクセス. [www.haotrai.com/kh/ឥឡូវកម្ពុជាស៊ីរីយ៉ា](http://www.haotrai.com/kh/ឥឡូវកម្ពុជាស៊ីរីយ៉ា) (Gambīrakambujāsuriyā)-35.
- . 1927c. Secaktī rāyakāraṇ° qambī taṃnoe dau kân sruk Kūsāṃṇsīn camboah khett tael mān vatt lok saṅgh Khmaer. in *Kambujasuriyā*. qṭthapad kpāl dī 2 chnam dī 2 khsae dī 9. pp. 647-687. (「カンボジア人僧の寺院がある州についてのコーチシナ紀行報告」『カンブチア・ソリヤ』, 2年度第2巻第9号) haotrai. kambujasuriyā. 2020年5月5日アクセス. [www.haotrai.com/kh/ឥឡូវកម្ពុជាស៊ីរីយ៉ា](http://www.haotrai.com/kh/ឥឡូវកម្ពុជាស៊ីរីយ៉ា) (Gambīrakambujāsuriyā)-35.
- . 1927d. Secaktī rāyakāraṇ° qambī taṃnoe dau sruk Kūsāṃṇsīn camboah khett tael mān vatt lok saṅgh Khmaer. in *Kambujasuriyā*. qṭthapad kpāl dī 2 chnam dī 2 khsae dī 10. pp. 697-714 (「カンボジア人僧の寺院がある州についてのコーチシナ紀行報告」『カンブチア・ソリヤ』, 2年度第2巻第10号) haotrai. kambujasuriyā. 2020年5月5日アクセス. [www.haotrai.com/kh/ឥឡូវកម្ពុជាស៊ីរីយ៉ា](http://www.haotrai.com/kh/ឥឡូវកម្ពុជាស៊ីរីយ៉ា) (Gambīrakambujāsuriyā)-35.
- . 1930. Prasāsan° lok gūveraṇoe hsenerāl camboah n̄yn paṇṭārāstr Khmaer knuñ taen Kūsāṃṇsīn khān dis niraṭī. in *Kambujasuriyā*. chnam gamrāp 3 khsae 1. Phnom Penh. Brah rājapaṇṇālāy. pp. 5-26 (「西南コーチシナにおけるカンボジア人に対する総督のお言葉」『カンブチア・ソリヤ』, 3年度第1号) haotrai. kambujasuriyā. 2020年5月5日アクセス. [www.haotrai.com/kh/ឥឡូវកម្ពុជាស៊ីរីយ៉ា](http://www.haotrai.com/kh/ឥឡូវកម្ពុជាស៊ីរីយ៉ា) (Gambīrakambujāsuriyā)-35.
- . 1942. Vidyudesanā kaṇḍ dī 1. in *Kambujasuriyā*. qṭthapad kpāl dī 1 chnam dī 14 khsae 7. pp. 3-11. (「ラジオ説法第1話」『カンブチア・ソリヤ』, 14年度第1巻第7号) haotrai. kambujasuriyā. 2020年5月5日アクセス. [www.haotrai.com/kh/ឥឡូវកម្ពុជាស៊ីរីយ៉ា](http://www.haotrai.com/kh/ឥឡូវកម្ពុជាស៊ីរីយ៉ា) (Gambīrakambujāsuriyā)-35.
- . 1970. *Kalyāṇamitt rabās khñum*. Phnom Penh. Buddhasāsanapaṇḍity. reprint, 1993 (『我が善友』, 仏教研究所)
- . 1995. *Uppattihetu nai brah traipīṭak prae*. Phnom Penh. Buddhasāsanapaṇḍity. (『三蔵翻訳の出来事』, 仏教研究所)
- Lī Suvīr. 2004. *Brah rājajīvapravatti samtec brah mahāsaṅgharājā Nil Diañ*. Phnom Penh. Buddhasāsanapaṇḍity. (『ニル・ティアン僧王のご経歴』, 仏教研究所)
- Lvī Aem. 1942. Vidyudesanā kaṇḍ dī 2. in *Kambujasuriyā*. qṭthapad kpāl dī 1 chnam dī 14 khsae 8. pp. 3-9 (「ラジオ説法第2話」『カンブチア・ソリヤ』, 14年度第1巻第8号) haotrai. kambujasuriyā. 2020年5月5日アクセス. [www.haotrai.com/kh/ឥឡូវកម្ពុជាស៊ីរីយ៉ា](http://www.haotrai.com/kh/ឥឡូវកម្ពុជាស៊ីរីយ៉ា) (Gambīrakambujāsuriyā)-35.
- Nagaravatta. 1941. Madymasael Kārapūlaes qggalekhādhikār nai Buddhasāsanapaṇḍity dadual roetraet. in *Nagara vatta*. Samedi 15 Mars 1941. (「仏教研究所事務局長カルプレス女史が退職なさる」『ナガラワッタ』, 1941年3月15日土曜日)
- Oum Sour. 1927. Traipraṇām saṅkhep. in *Gihipāṭṭatt*. Phnom Penh. Brah rājapaṇṇālāy. reprint, 1997 (「三宝崇拝概説」『在家の実践』, 仏教研究所)
- Sin Suvanṇani. 2005. *Pravatti brah traipīṭak Khmaer*. Phnom Penh. samrāp jā dhammādān. (『クメール語三蔵の歴史』奉納用.)
- Sym Ratanah. 2013. *Saddānukram brah buddhasāsanā*. Phnom Penh. Buddhasāsanapaṇḍity. (『仏教用語集』, 仏教研究所)